

「それらしい雰囲気」を味わうために

編集部

毎日掲示板見てますか？（義務ですよ！）掲示板にはいろいろな連絡、情報が集められ、“ビラ”という形でとろせましと貼りつけられています。その中に〇〇セミナーとか△△講演会などというビラが貼られているのを御存知ありませんか？ブルーやピンクの紙を使ってすぐ目につくものもあって、書かれてあるテーマによっては、興味をそそられるという人もいます。『飛翔』ではこういったセミナーについて取りあげて見ることにしました。

一概にセミナーと申しましても、実に多様で、授業として行なわれるもの（「社会文化ゼミナール」など社会文化コースにみられます）もあれば、学生どうして自主的に作っているようなものもあります。特にこの学生による自主ゼミなど一体いくつくらいあるのかちょっと見当もつきません。そんなわけでこれから紹介するセミナーは、総科の連絡用掲示板で、いつ、どんなテーマで、といった情報が得られ、また誰がいつ参加してもよいというものを取りあげました。

●環境セミナー

「環境」というものをとらえ、自由討議の場として開かれたセミナー。原則として第1、第3火曜日の夕方5時半から月に2度開かれます。このセミナーの前身である「生態系ゼミナール」から数えると150回を越えるという歴史をもっています。話題提供者は総科の教官だけでなく、院生であったり、他の大学や研究所などの研究者であったり、時には外国の研究者も含め内容も実にさまざま。討議に時を忘れ、つい時間を延長してしまうこともしばしばです。

●生命科学セミナー

個体レベルより小さいものをテーマとしている、生命科学の最先端をこのセミナーで聴くことができます。このセミナーも歴史が古く、開かれて7年にもなりますが、毎月1回の開催は欠かしたことがないというのが自慢。主に視聴覚設備のある教室で行なわれます。他のセミナーもそうですが、自分のコース、専攻にこだわらず、興味があればぜひ一度参加してみてください。

●情報行動科学コースセミナー

昨年の12月にスタートしたばかりという新しいセミナーで、情報行動科学コースの教官が自分の研究内容について発表し、みんなでディスカッションしようというセミナーです。もちろん他のコースの人が参加するのも自由です。不定期ですが1年に1～2回の開催を予定しています。このセミナーのあとにつづく懇親会と称する夕食会では、リラックスして本音で話し合えます。

●社会文化講演会

社会文化コースの教官、学生などによって組織されている「社会文化会」がその活動の一貫として主催している講演会です。1年に1回、主として秋に行なわれます。主に他の大学（海外も含む）から教官を招き、講演していただくということですから見のがせません。総合科学部にとどまらず、多くの人に参加をしてもらうために「教養講座」（後述）と共催で開かれることもあります。

●教養講座

総合科学部の学生のみではなく、広く一般教育課程の学生に向けて開かれた企画です。テーマの選び方には自然科学、人文科学、社会科学と幅広く、余り偏りのないように配慮されています。4、5月から12月にかけて5回くらい開かれます。開催前には掲示板にひときわ大きなビラが貼られます。興味のある方はぜひ聴いてみてください。

これらのセミナーはいつでも、好きな時に参加することができますがここに掲げたものはそのほんの一部です。自分のコースがまだ決定していない一年生はもちろん、もうコースの決まってしまった（？）人にも専攻以外の分野にもどンドン首を突っ込んでもらいたいです。それは自分の視野を広め、総合科学部を知り、そして何となく「それらしい雰囲気」を味わうためにもきっと役に立つことでしょう。

（文責 海堀 修）

4年生は語る

今年度もまた卒業のシーズンがやってまいりました。そこで、特集の締めくくりとして、卒業していく4年生方に就職、卒論、そして4年間について書いていただきました。題して「4年生は語る」のコーナー。

マスコミ十番勝負

社会文化コース4年 桐木 淳二

もうとっくに昼をまわっているだろうが、ふとんから離れたくない。眠って現実から逃げ出したいと思うときほど、目が冴えて頭の中を色々な考えがかけめぐる。後悔と不安のため息がメビウスの輪をつくっている。デジタルウォッチを何度切り替えても、日付は11月15日。既に8社に敗れ去った私は、残る1社の筆記試験の結果を待つのみになっていた。

前号(No.27)で述べたインド旅行で、私は数々の思い出とともに赤痢菌まで持ち帰ってしまった。3週間の隔離生活を強いられ、就職活動の出端をくじかれてしまった。もともと、新聞社を希望していたが、一方で、広告代理店に入社された、2期上の先輩の言葉にひっかかっていた。「何かを創り出す仕事をしたい」。そこに自分の求める仕事のおいを感じていた。

結局、一般教養に自信がなかったこともあって、広告代理店に照準を定めた。「マスコミ十番勝負」とカッコよく銘を打って、広告代理店8社、新聞社2社に願書を提出した。夏休みに上京し、面接に慣れるため中堅広告代理店に会社訪問しようとしたが、体よく断わられた。それからは、志を異にするため一般企業は1つもまわらず、10月の会社訪問解禁を待った。このことが後々まで響いたことになる。思っていることを他人(特に年長者)に伝えるということは、慣れていないと難しいものだ。

実質9月末からのD通の会社訪問を皮切りに、ぶっつけ本番、面接に挑んでいった。それから1月半、一次試験はクリアするが、それ以上は進めなかった。1つ落ち、2つ落ち、そして8つ落ちると、「自信」を失うなんてもんじゃない。自分「自身」を失ってしまうかのような感覚だ。

ふとんの中でくすぶっていると、唯一残っていた広告代理店から二次面接の来社を伝える電報が届いた。もうあとにはひけない。これをのがすと留年、私は2浪しているので計3年だぶると、まず順調な就職は困難である。はやる心を抑えながら、何が悪いのかを反省してみた。

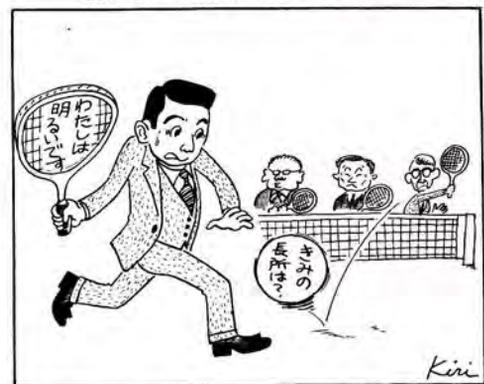
もともと、地方であることのハンデとは何だろうか。私が思うに、標準語でない方言言葉で、友人となれ合いで喋るくせがついていると苦勞する(私だけだろうか)。人間性に差があるはずはない。面接で一番重要なのは表現力である。大手広告代理店の人の話を聞くと、会社の方針としては地方大学も採用したいが、如何せん、喋れない人間が多いそうである。畢竟、首都圏大学の学生ばかり採用することになる、という。考え方とか知識とかはさほど重要ではない。人とつき合う上で、自分をうまく表現するために喋れるということが最重要ポイントである。私は当初、言葉はまずくても情熱は伝わるはずだ、と考えていた。しかし、それは土台無理な話だった。

喋れるということは、会話で自分を表現することである。当り前のことだが、面接官との会話の中に個性を織り混ぜるのは結構むずかしい。答えに窮するようならそれまでである。

以上のことを考えに入れながら、二次面接に臨み、これまでの中で最高の対応ができた。最後の最後で留年を切り抜けた。

実際、運もよかったのか、マスコミと呼ばれる所に就職できた。地方大学だと臆することはない。企業側もそのような区別はしていない。要は自分を磨くことであり、自分を表現できるかにかかっている。

斬気淳二の飛翔批評バナシー②



「ちゃんと返さなくちゃ、面接試験」

公務員志望の君達へ

社会文化コース4年 松本秀一

公務員を志望する場合、それが国家であろうと地方であろうと、または上級であろうが中級であろうが、採用試験にパスしなければならないのは周知のとおりである。この採用試験だけは、多分コネの最もきかないものの一つであろうから、個々人ともそれなりの対策をしておかなければならない。それについて、多少のアドバイスらしきものを先を行く者として述べてみたい。

ただ、御存知の方も多いと思うが、来年度から国家公務員採用試験にかなりの改変がなされているので、ここで述べるのは60年度までの試験制度を基準にしていることに注意してほしい。時期の問題を除いては、対策は大差ないものだと思うけれど。

まずは、試験勉強の開始時期については、早ければ早い方が良いに決まっているので、ここではあまり触れないが、地方上級、国家上級(来年度からはI種)などの採用試験の時期が早いので、4年生に上がる前に始めていた方が良いでしょう。特に国家中級(同II種)は試験の時期が早まるので気を付けて情報収集しよう。次に勉強の方法についてだがこれは個人個人で、その人なりの方法があるだろうから、例を示しそれについて述べると、私の先輩方が行っていたように数人集って勉強会を開くのが真剣にやるのなら最も効果的ではないだろうか。なんとすれば、試験範囲が非常に広いので数人集って互いの知

識を交換し合うのが能率的であるし、また互いに競争心を持ち意欲が湧くからである。それに、択一式の問題の場合、カンがものをいう比重も高いので、それを養うために択一式に慣れておくことも必要である。個別的には、一般教養の一般知能の問題は配点比率が高く、問題に慣れておけば確実に点が稼げるので十分努力してほしい。

そして一時試験に合格すると、二次試験は多くが面接であるが、これは公務員を志望した理由、公務員としての心構え、大学での体験などについて中庸的に答えることができれば良いだろう。地方公務員の場合は、この時論文試験があることが多いので文章を書く練習も必要。

最後に、最終合格者となった場合、地方はそれでほぼ採用となるが、国家はその後各省庁面接が残されており、これがかなりきびしい。まず合格発表当日、各省庁から直接に面接の誘いの連絡がほとんど電話でなされるが、こちらから積極的に連絡をつけるのが合格への近道であるとも言える。なぜなら、その方が多くの省庁面接を受けられる可能性があるし、その積極性をチェックする省庁の人事担当者がいるらしいからである。

これで一応の説明を終えるけれど、結局はあなたの努力と運しだいであるので、私たちはあなたの御健闘を祈るのみである。

卒業、そして進学

環境科学コース4年 吉田道生

総合科学部にはいってはや四年たつ。自然環境をとりあつかう研究をしようと思ったのは、どういふ手法を用いて研究するのか決めかねていたときに見たのが総科の入学案内である。選択の幅が広く、猶予期間があり、カリキュラムを見て四年間で最先端人になれると思ってしまった。ところがはいてみると自分にとって選択の幅が広すぎ猶予期間が長すぎたようである。何もわからず総合科学部的なものを求めてあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしたもの、どれもこれも奥が深く短期間では身につくそうもない。おいしいところだけかじって中途半端に終わっていた。こんなことでは総合科学部的な論文など書けやしないと悩んだ末、結

局総合科学部的な論文を書くのをあきらめ、こう考えた。自然環境を考えるのにも何か基礎となるべきものがないといけないのではないだろうか。3年間より道ばかりしていた自分には基礎となるべきものがない。そこで4年生の時、基礎となるべきものとして選んだのが地質学である。地質学を選んだ理由は、野外での調査が主であること(しかし金がかかることもある)、過去に起こったことを調べるわけだから想像力が豊かになること(しかし実験できないので推定の域を出ない)、そして物理、化学などの諸分野では容易に出来ないだろうと思われる新発見を、地質学の分野では学部生でも充分でき、過去の説をくつがえすことも可能なことなどである。しかし地

質学という分野も幅広く、奥が深いのでまだわからないことばかりで、結局4年間で何もものに出来なかったと思う。総合科学部的な論文とはどういうものなのか、このために地質学を選んだのは良かったのだろうか、などいろんな疑問は残っているが、地

卒論のあとに

どう語れば良いのだろうか。たとえば、意識の面に於て自由で自立の人間であることを志向しながらも、現実の存在としては物と物との関係に作用された人間関係の中でしか存在できないことを、現実知らしめられる契機に恋愛や就職がある、とでも抽象してみよう。自分の場合、進学に於ては意識として不自由を感じなかった。総科には理系で受験し地域文化の比較に籍を置いて、国語の教師になるところまで転身していった。国語はいいが教師は地元との相談だ。親の引力は長男にはきつい。といってもそれを自分が決めたのだ。

自分の生き方の不連続性を悔やんでいるのでは毛頭ないし、出自や「家」を呪っているのでもない。また高橋和巳のように「なくもがなの偶然」を恨んでみても、関係の内に安らぐ幸福に「敗れた」と諦念しても、無意味だ。実際、制度と神話の支配する関係の内でのみ人は人でいられるのだから、偶然も関係も一応引き受けた振りにはしなくてはいけない。関係を欺くことは支配者志向だし、関係の中での怒りも憐憫も同一対象に向けられた神の如き感情だ。

なんだかこう約せばこれが大学で実際に知った根幹のような気さえして恐ろしい。全共闘から浅田現象、平凡な大学生です、私。古典的な合理主義、人間主義的人間像に対して、激情、エートス本意の非合理主義的人間の出現の後の、構造的人間志向とでも解釈しようか。嗚呼、悪しき観念への逃避。反省的文章の哀しさよ。

遅ればせに奥手な恋愛もした。手を握ることさえためらった。自分の自然がなくなった。現在に対して「気を許せば一生に蜂起する過去」(和巳)も持った。つくづく女性は現在に生きていと実感した。「女族」だと思った。その時自分はユングを読んだ。アニマと解釈した。解釈だけが一人歩いた。手前勝手な願望だった。そして、今でも…。

はて、この文章は誰が読むのかしら。後輩(?)。しかし自分が後輩のとき読んだ記憶も見たためしも

質学を基礎にしてこれまでのより道の分をつけ加え、これからも少しより道をしながらあと2年間、総合科学部的論文を求めて大学院で研究してみようと思う。

地域文化コース4年 近藤龍二

ない。誰に向かって書いて良いのかわからない。いやらしい文章になりそうだ。鼻をつまんでいるか、君たち!

といてこういう場を与えられたことは、嬉しい。卒論を遅ればせに提出した後、ポケットとする期間の暇つぶしには最適だ。私は後輩に主張したい教訓など持たない。それはお互いにとって莫迦莫迦しいことだ。だから少し恥かしい文章になってしまっているが、

立つ鳥後は野となれヤマトナデシコ七変化。これぞ、脱皮の極意だ。自分が孕んだ自分を生む。

有用なるがゆえに有害な教訓ではなく、体験談としても一つ、教員採用試験について語ろう。

受験日が違っていたので広島と愛媛を受けた。試験科目は同じだった。一般教養、教職教養、高校国語の専門試験として現代文、古文、漢文。あと広島は学習指導案を作らせた。材料は『徒然草』の有名な所。並べて試験勉強とは無味乾燥なものらしく、

斬気淳二の飛翔批評バナシー④



「ああ片思い・就職活動」

特に教採試験の勉強は青春という時をいとおしくさせる。だが、どうせやるなら楽しい方がいい。私は答え合わせに酔った。なにせ大学入試用問題集と教職用の「要点整理と頻出問題」をやれば事足りるわけで、それには何と当り前だが有難いお答えが付いている。答え合わせは久しく忘却していたマゾヒスティックな興奮を呼ぶ。そしてその快感が慢性の兆しを見せた頃に試験日を迎えた。自分でも苦笑するしかない程緊張していた。自分の意志と無関係に震える膝を見て実際笑ってしまった。だから「松尾芭蕉」とか「湯川秀雄」とか書いてしまった。

試験はそんなものだったが、面接の時は違った。まず面接官に腹が立った。あの曲解能力！正直、莫

迦かと思った。が、逆に自分の言うことをわざと下手に聞いてこちらの論理性を試そうとしているのかとも思えた。あの人物は巧妙の木登り、それともヤジ馬。どちらにしても、自分が入ろうとする社会の恐ろしさを感じた。

自分は四月から試験勉強を始めたせい、あの快感が慢性ぎみになり、今では車の学課試験の勉強で細々と自慰しています。六月くらいから始めればよかった。その程度で大丈夫だろう。

あんなものに慣れないことに越したことはない。楽しさにも気品が必要だ。高貴に遊ばないと「制度」の奴隷になってしまう。卑しい信者もゴメンだ。

最後に、私、ニーチェ好きです。そして今でも。

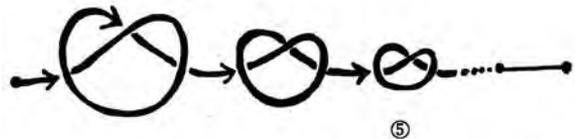
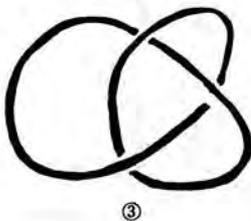
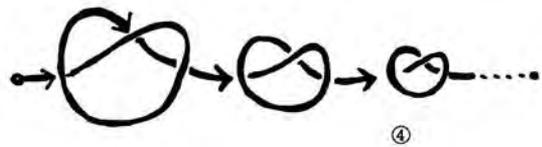
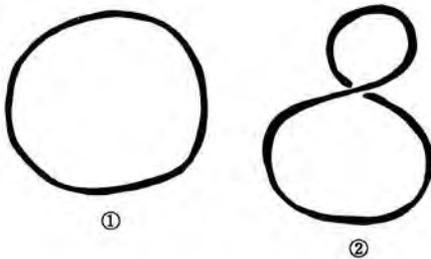
数字のでない数学

環境科学コース4年 上村美雪

今年の大学受験の傾向は国公立離れで、しかも2次に数学のある学部は特に敬遠されるとか聞きます。「数字みるだけでいや！」という人が多いのですが、どうしてこう数学は嫌われ者なのでしょう。総科の理系の人には数学好きだったけど、一般教養の微積、線代の授業でやんなっちゃったという人が多いと思います。私は微積の最初に出てくる $\epsilon-\delta$ 論法

の意味がわからず、こんなにわざわざ難しく言わなかったって直観でわかるじゃないの、なんて思っていました。しかし今は数学のおもしろいところは、あたりまえだと思っていた事が、本当にあたりまえなのかどうか考えるところにあると思います。

例えば図(1)・(2)・(3)はどれも一本のひもを使って作ることができます。ところで(1)を動かし



て(2)を作ることはできますが、(1)から(3)を作ろうと思ったら一回ひもを切って、又結ばなければなりません。つまり(1)と(3)はひものつながり方が本質的に違うのです。それでは次に(4)・(5)をほどいて一本のひもにすることができるでしょうか。

(4)は結び目をだんだん小さくしながら無限個つなげたもの、(5)は(4)の右端に線分をつけたものです(ひもの太さは考えません)。実は(4)は一本のひもになりますが、(5)はなりません。なぜ尾っぽをつけただけでひもの性質が変わってしまうのかという事を勉強しているわけですが、みなさん一体何のためにこんなことをするのだろうか? 大体、無限の結び目をもつひもなんてこの世に存在しないのだから、それがほどこようとほどこけまいと関係ないじゃないかと思われると思います。しかしこうした勉強の中で無限というものがぼんやりとですが見えてきます。無限というのはただ単に大きい数というのではなく、有限とは本質的にちがうものです。人間は直観的に無限とか連続とかを理解することができません。ところがコンピュータはどれだけ大きい数が処

理できてでもそれは高々有限な数だし、デジタルである以上非連続的なものです。21世紀は考えて判断するコンピュータが出現するといわれていますが、有限と無限、可算無限と非可算無限の本質的な差がコンピュータの限界として現れてくるはずだと思います。コンピュータの可能性についてOAとかINSなどの実用的な面からだけでなく、本質的に何ができるのかを考える時、まず人間自身がどのような論理展開で物を考えているかを知らなければいけません。その対象とするものとして、定義が明確で簡素な数学は有効だと思います。図(4)、(5)のひもがほどこれるかどうかという事自体はそんなに重要とは思いませんが、直観にたよらずに明確に定義されている言葉だけをつかって論理的に考える過程におもしろさがあると思います。

昔、高校の化学は大学の物理で、物理は数学で、数学は哲学になると聞いた事がありますが、数学が数字の山と思っている人に、数字のでない数学の存在を知ってもらいたいと思います。

斬気淳二の飛翔批評バナシー③



「それじゃ、お先に上がらせていただきます」

4. 新設 生物圏科学研究科

編集部

今春より大学院の生物圏科学研究科の新設が予定されています。これによって総合科学部では、主に自然科学系分野において博士課程の大学院の完成がほぼ実現されることとなります。ここではこの生物圏科学研究科について紹介したいと思います。

総合科学部に博士課程の大学院を設置するという構想は、総合科学部を創設する構想の一環として考えられたものでした。つまり、学部を基盤とし、さらに大学院を通じて教育や研究を行うシステムをつくるという構想です。総合科学部が誕生したのは昭和49年のこと。それに引きつづき大学院はまず第一歩として昭和53年度に、自然科学系の環境科学研究科と人文・社会科学系の地域研究研究科という、2つの修士課程の大学院がつけられました。そして今春からまず環境科学研究科が、博士課程の生物圏科学研究科として発足するという運びとなったのです。

この生物圏科学研究科は、総合科学部と生物生産学部がタイアップして基礎をつくり、さらに工学部や医学部などから協力を受けてつくられたという、従来の大学院にはない新しい構造をとっています。これは昭和54年にまとめられた「広島大学大学院整備構想について」に基づいているためですが、その奥に1つの学部の領域にとらわれずに既存の自然科学分野の研究科とは異なる独自の領域をつくらうという姿勢がみられるように思われます。

この研究科は環境計画科学専攻、生物機能科学専攻、生物生産学専攻の3つに分かれています。

●環境計画科学専攻 調和のとれた環境の保全・調節・開発をめざし、基礎的な研究を行います。この専攻は3つの研究分野にまたがっていて、環境を社会や人間を通してとらえる社会環境分野、自然環境の管理・開発の方策を探る自然環境分野、環境を開発するとともに他の2専攻における研究の基礎技術を提供する環境技術分野に分かれています。

●生物機能科学専攻 生体分子から個体群にいたるまでの生物のもつ機能を研究し、その機能を利用するバイオテクノロジーを活用して、新たな生物資源の開発や環境保全技術の発展をめざしています。この専攻には、自然環境と調和した生物機能の維持と

生物資源の有効利用への基礎的原理及び技術について研究する、生物機能に関する基礎的分野と、生物機能を生物生産学及び環境科学へ有効に活用するための応用技術の発展をはかる、生物機能に関する応用分野の2つの分野から構成されています。

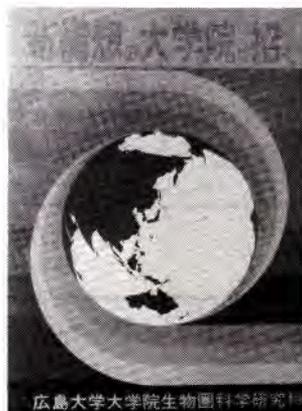
●生物生産学専攻 食資源生物を主たる対象として生物の有効な利用と管理、その生産の機能と構造について総合的に教育・研究を行います。この専攻は、海洋における食資源生物の生産機構について、基礎研究から応用生産技術まで総合的に行う海洋生物生産に関する分野と、畜産物の基礎的研究から応用面まで総合的に行う畜産科学に関する分野、そして生物資源の有効利用の技術を研究する、食品科学に関する分野という3つの分野から構成されています。

この研究科では学生に対して幅広い知識と専門性が養われるように、そして広い視野に立ち、学際的な諸問題に取り組めるようなカリキュラムで教育・指導を行うなどの基本的な方針も決められています。

なお、この生物圏科学研究科についての詳しいことは、学務第一係に詳しいパンフレットが置かれることになっていきますので参考にしてください。

今、この新しい大学院はまさにスタートを切った、といってよいでしょう。しかしそれを実際に動かしてゆくのは“人”なのです。教官や院生などの直接に関係している人々はもちろん、学部生の皆さんもこの生物圏科学研究科がどんな方向に向かってゆくのか見守ってほしいと思います。

(文責 海堀 修)



生物圏科学研究科
の広報ポスター

私は果たして正しい場所にいるのだろうか、いつも思う。空間の中で、時間の中で、せめて私にとって最も居心地の良い場所を、と願っただけで、自分の部屋の自分のための場所さえ、妙に落ち着きの悪い場所のように思えていたたまれなくなる。

キリスト教徒の中には、今でも地動説や進化論を否定している宗派があるという。宗教的世界観を持つ者にとどまらず、科学の進歩が次々と証明してゆく新しい世界が、私の最も居心地の良い世界に相入れないものであったとしても、それを受け入れるべきだという義務を、私たちは負っているのだろうか。何よりその新しい世界が正しい世界であると、一体何が証明するのか。しかも、現代では、相入れない世界は疎外せねばならないという根拠も、私たちは持たない。そして、もとよりその選択が私たちの手に委ねられているわけでは、決してない。

守るべきもの。疎外すべきもの。何かをすべきだと自分に課する時、人は、自分の世界をたまらなく愛しいと感ずるに違いない。けれど、守るべきものが同時に疎むべきものであったなら——人は二つの椅子に同時に座ることはできない。そうでなくとも自分がどんな椅子に座っているのか、座っている本人には決して見えないというのに——一体何に対して、自分の世界などというものがあろうのか。もう、どんな世界にも住めないのだ。膨張しすぎた世界は破裂する。それが掟だ。

日々だとか、年月だとか、季節だとか、と名付けられたものだけが、権限を吹き抜ける風のように、後に残される。

守るものばかりの、呪縛されたように絶対化された世界にも、何一つとして疎むべきものばかりの、茫々と相対化された世界にも、私には住めないと悟った時、二つの世界の境で絶え間なく続く“今”の連続の、ある時ある地点で私は一本の釘を打つ。その点は今までの日々も、これからの生活も、炸裂し分散し去った私の全てをブラックホールのように吸収し尽くすだろう。私はその上に小さな椅子を置こう。玉座のように、誇らかに。そして私は、はかなく移ろいゆく季節の上に、凜として君臨するのである。

※総合科学部の教室の椅子の数…3898脚

(文責 向山教子)



6. 退官インタビュー

昭和60年3月をもって川村 毅、式部 久、下村健次の3教官が停年退官される。そこで、3人の教官にお話をうかがうことにした。なお、下村教官は先生ご自身のご意志により、お話をうかがえませんでした。先生のご意志を尊重して、ここに川村・式部両先生のインタビューのみを掲載することになりました。

編集部



川村 毅(かわむら つよし) 大正11年生まれ。昭和19年東京体育専門学校(現・筑波大学)卒業。同年、和歌山青年師範学校助教授。昭和21年広島高等師範学校助教授。昭和26年広島大学皆実分校助教授。昭和39年広島大学教養部助教授。昭和43年同教授、昭和49年総合科学部教授。昭和55年より体育学部準備室長。

先生はアキレス腱の研究で医学博士の学位を取得され、体育に新しい基軸を開くべく、健康科学という面からアプローチ、研究活動を行なわれた。そして、広島カーブのトレーニング・アドバイザーとしても活躍されている。

— 先生は総科が創設されたころからおられたわけですか。

そうです。総合科学部を作る時、たまたま私は評議員で責任者の1人でした。それで忙しく走り回った思い出があります。

— 特にそのときのご苦勞などを。

統合移転、総合科学部創設、それからこれはまだ実現されておりませんが、私が現在、責任者になっている体育学部の創設、そしてさらに、大学院博士課程問題、こういう問題が考えてみると、学園紛争というもの非常に大きな引き金になったということです。なにしろ広島大学というのは分散しているでしょ。たこ足大学ですよ。そういうようなことで学生たちとの憤懣もあって、当然のことながら、1つのキャンパスにまとめるべきであるということになりました。当時、僕も移転委員をやっていた関係でいろいろな候補地を实地調査しに行ったわけです。

それで特に東広島、当時西条でしたけど大変熱心で、キャンパスも十分確保できるということから西条に統合移転することになりました。そういうことがさっき言った体育学部問題、これはたいへんな施

設を必要とするものなので、新しいキャンパスならば十分対応しようという物理的な面に可能性を与えたわけです。結局、この体育学部というのも総合科学部と切り離すことのできない問題で、総合科学部の中に体育学部創設準備室といったものができたわけで、たとえば、事務関連もむこうで体育学部ができたなら、総合科学部と体育学部が姉妹学部になって事務も一本化していくということです。だから、そういう意味では総合科学部ができたということは非常に大きなメリットがあるわけです。確か、体育学部ができると12学部でしょ。これにもし薬学が将来独立するとしたら、国立大学の中で学部数からすると、広島大がNo.1ということになるわけです。それで、私は直接関係ないけれど、芸術学部を作れと言うんだ。するとね、世界で例をみない、まさに文字通りの総合大学の体をなすわけですよ。なにしろ物理的な面では用地は十分あるわけだからね。

— 創設から十年たったわけですけど、創設当時の理想と比較して、現在の総科をどうお考えになっておられますか。

そうですね。今年から生物生産学部と、生物生産

だけでなく医学部とも関係ありますけど、自然系のドクターが実現できるということで、そして、それに今度は文化系ね。地域とか社会とかが1つになってドクターができると。そこでね、総合科学部というのがはじめて完成するわけ。そうすると、ドクターまで出たこの総合科学部出身者が今度は研究者として大学に残ってやってくれと、その時点でね、総合科学部がどうであったかという評価ができるのであって、今はまだ発展への過程でしょ。今の段階で私は総合科学部を評価するのは時期尚早だと。だから、ドクターまで全部完成して、もちろん undergraduateで大学院に行かずに出ていく人がいるわけだけど、ただ学問として評価するというからには、やはりドクターまでということを考えねばならないし、undergraduateで今のような見方を、出ていった連中がどのようにそれぞれ得た職場で活躍するかということが、総合科学部の評価につながっていくと思います。私はね、総合科学部というのはそういう意味では小さな日本だけを考えないで、海を越えて、外国に拠点をつくっていくというふうな、非常にバイタリティのある卒業生の生き方というものを期待したいね。例えば、広島周辺部だとか、中国地区とか、そうじゃなくて、もっと日本のあらゆる地域、それをさらに海を越えて、さっきも言ったように外国へというふうな進路を積極的に開拓してほしいと思います。そこに僕は総合科学部のひとつの大きな夢があると思います。

—— 特別、何か総合科学部生に対する印象はありますか。

ありますね。少し甘えているのじゃないかという気がします。総合科学部、新しくできた学部でいろんな面から囑望され、期待されている。一般社会もそうだからね。新聞記者あたりに言わせると、先生総合科学部ができて大助かりですよ。取材が便利だからって(笑)。もうあらゆる教官がいるわけですよ。総合科学部に来れば、なんでも解決するでしょ。総合科学部はまさに一つの大学だよ。まさに総合大学の体をなしている。教官組織にしたって、哲学からはじまって、ずーと体育まで全部網羅しているわけでしょ。総合科学部はまさに総合大学のミニ版だね。だから、学生はもっと積極性があれば、いろんな研究室の門をたたいて、いろんな先生がいるんだから、これぐらいすばらしく恵まれた世界はないと思うね。と同時に総合科学部に対する在来の学部のジェラシーがあるのかもしれないね。これからの

時代を予測して作った新しい学部だからな。

—— だから、やはり先ほど先生が言われたようにいろんな研究室の門をたたくというのは、バイタリティと言うか、食欲さにつながるわけですね。

そうですね。でも、君らに責任があるとは必ずしも言えないわけです。家庭の親の教育がそうだもんね。とにかく、エサを口のそばまで持ってきて、さあ食べろというふうな教育受けているわけだから。甘やかされたね。僕がよく学生に君たちは今までに両親にぶん殴られたことがあるかと聞くと、三分の一もない。全然、殴られた経験がありません。殴るということはいいということじゃないけれども、幼児から児童期にかけての家庭におけるしつけの厳しさというものが欠けているんですよ。だから、今の若者に共通した点は何かということ、まず平等主義だよ。平等主義という一見いいように思うけど、人間、悪平等じゃあ進歩ありませんよ。そして、金銭的に誠にドライだ。機能的人間になりかけているね。3番目に、立ち止まって物を考えない、言ってみれば、思考停止型だ。4番目は、耳年増だよ。情報化の中で無理もないと思う。出も、すぐ結論だしちゃうんだよね。すぐ結論出して、にっちもさっちもいかないと。5番目に大変大事なことは、体を動かさずとしない、使おうとしないね。汗や泥にまみれることを厭うわな。これじゃ、いかんと思う。もっと、こう野生味がないとね。一万円札の顔になりました福沢諭吉はおもしろいことを言ったでしょ。天は人の上に人を作らずとか、三つ子の魂百までとか、三才までの教育は言葉でなく、目であり、態度であると。もう一つね、いろんな中で素晴らしいことを言っている。人、はじめに獣心をなして、しこうしてのちに人心を養うと。知識というものは二の次だよ。まず動物としてのバイタリティを持って、その上に高い知識を持つてということだ。人、はじめに獣心をなして、しこうしてのちに人心を養うというね、そういう気がします。

—— ご退官された後はどうなされるのでしょうか。

退官した後は国立鹿屋体育大学の副学長が予定されています。(談)

(文責 野田 啓三)



— 学部創設の頃は御苦労も多かったことと思いますが。

全学の改革委員会の委員長とか、教養部の評議員とかしていましたから、いろいろな面で苦労しましたね。全国的に全く新しいタイプの学部ですから。どういう性格の学部にするか、殊にそれを広島大学の改革計画全体の中でどう位置づけるかということ、そしてそれを広島大学の他の学部にどのように理解してもらおうかといったことで苦労が多かった。いろいろな抵抗があって、全学一致の理解や支援を得るのはなかなか難しかったです。大学院も、学部の出発後すぐから、大学院をどう作るかで立案の苦心があり、他学部や文部省の承認をとるのに苦労しました。最初は学部ができたといっても教授陣が不足していましたから学生諸君にはいろいろ苦労をかけたと思います。カリキュラムにしても毎年変わってしまいましたね。ただ当時は学生にも教官にも意気込みがあり、いろいろ不便はかけたけれど、それなりにそれぞれ何かを得て卒業してくれたと思います。

— 学部長時代はいかがでしたか。

学部長時代の一番の課題は大学院のドクターコースを創るということでした。日程としては私の学部長時代に出来てもよかったですのですが、全学的な案を作るのにうまくいかないところができ、案を作っては消し作っては消しということになって日の目を見ることができなかった。学部生の問題で言えば、情報行動コースの志望者が多く、今の定員では志望者が全員は入れないということがあります。その問題を学生が訴えてきた時には、頭だけでなく心まで悩ませましたね。履修の組立ての自由という学部の理念からして全員の志望に添うようにしたいのですが、教官の配置や社会の需要ということもあって、なかなか難しいのです。これからも検討を続けていかねばなりません。しかし、総合科学部もだいたい

式部 久(しきぶ ひさし) 大正11年生まれ。昭和17年広島高等師範学校(文科)修了、昭和19年広島文理科大学(哲学科)卒業。同年、北海道第三師範学校助教授。昭和28年広島大学皆実分校講師、昭和30年同助教授。昭和39年広島大学教養部助教授、昭和40年同教授。昭和49年広島大学総合科学部教授、昭和52年広島大学総合科学部長(昭和57年3月まで)。文学博士。

において軌道に乗ってきたようです。後は学生が結果を出すことです。いい教官やいい学生が集まって来るよう、先輩として頑張ってくださいと思います。

— 創設当時の総合科学部に対する世間の反応はどうでしたか。

非常に期待されていたといえると思います。新しいタイプの学部ですし、スローガンの総合的な研究・教育ということもあるでしょう。文部省からも期待されていました。一方では、卒業生の就職試験の時、会社の方でどこの部門にいられたらいいのかということまでいがあったようです。今はそれも理解されていますがね。受験生も当初は非常に多く、意欲のある学生も多かったんですよ。

— 先生御自身はどのようなことを御研究なさっているのですか。

元来はギリシア哲学の研究です。プラトンが中心ですが、実際にギリシア語を読んで、ギリシア哲学を正しく理解し、それを現代に生かし、発展させて、倫理学という形でまとめていくというのが主な仕事です。学際的研究ということでは、そういう理念に動かされたというわけではありませんが、私の場合はもともとがギリシア思想と現代人の倫理という、ある意味で複合的なねらいを持って研究に入っています。学部ができてからはヨーロッパ研究講座の一翼として、研究を出し合って総合的な成果をあげようという共同研究の努力もしてきました。科学研究費で学際的なテーマでの研究をしたわけですが、中にはもう本になっているものもあります。違う領域の人と接触することで、僕自身に還ってくるものも大きかった。総合科学部だからできた仕事ですね。しかし、自分に持つものがなければ人にも貢献できませんし、やたらに手を出すとアブハチとらずにもなりかねませんから、本当はなかなか難しいんですけどね。

— 御退官にあたり、総合科学部の学生への御要望等がありましたらお願いします。

まず、1・2年生の時間を大切にしたいということですね。一角の者になるというか、自分でこれというものを持つためには、若い頃に集中してそれに時間をつぎこまなければいかんと思うんです。総合科学部の学生は広い視野を持つという理念にひきずられすぎているようですが、若い1・2年生の時を様子見の時間にしてしまってもったいない。だから、1年生の時から、志望を固めてしまうところまではいかないにしても、自分なりに出来るだけはっきりした志望をもって、その方向で集中し、努力することが必要だと思います。これが僕が学生諸君に一番言いたいことなんです。自分は他のことに向いているかも知れないという、可能性の幅は残しておいていいんです。それが総合科学部のひとつの重要な点なんだから。ただ、そういう余裕を残した上で、ほぼ自分に向いている方向というのはわかっている筈なのだから、その辺は先生に相談するなり学生同士で話し合うなりして、出来るだけ早くスタートをきって欲しいというのが僕の希望なんです。一般に今の学生は、大学入試の圧迫が強いものだから、大学にはいるとしばらくの間、自由時間になってしまう。そのこと自体は、僕は否定しません。精神的な余裕としては、そういうものがあるのもいい

と思うんです。何をするか決まっていない時間というものが、人生には余りありませんからね。四年間で卒業して就職してしまえば、四六時中仕事のことばかり考えるわけですから、本来可能性としては幅広い筈の人生も狭くなってしまいます。それを考えると大学4年間、殊に最初の1・2年間はもちろん十分エンジョイして欲しい、生かして欲しいと思うのですが、さりとて時間は無限にあるわけではありません。1年生の時から、ある程度方向を見定めて、それなりのスタートをして欲しいと思います。

もう1つ、別の側面からの希望としては、教官と学生との親密さのある学部にして欲しいということです。これは私たちが総合科学部を創りたいと思った理由のひとつでもあります。大きな総合大学の中では、学生諸君も2千人のうちのひとりになってどこにいるのかわからなくなってしまふ。なかなか難しいことだけれども、私たちの願いとしては、こぢんまりした集団のよさ、親密な気持ちを持ち続けて、希望があれば余り構えないで相互に話をして解決して欲しいですね。交流のための行事を組んで努力しているわけですが、それを生かして、学部独特の気風を持ち続けて欲しいと思います。

— 退官後の御予定は。

岡山理科大学へ行く予定です。(談)

(文責 向山 敦子)

7. 特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース	氏名	論文題目名
地域	横田 泰行	近世広島藩農政に関する一考察
文化	喜安 政幸	ロック・ミュージックと文化変革
	藤本 柱子	アラン＝フルニエ — その生涯と<ル・グラン・モーヌ>
	村尾 信彦	深沢七郎論
	吉岡順一郎	立川流ドクロ本尊について
	小島居伸介	スマトラ・ミナンカバウ社会のムランタウ慣行：文化論的一考察
	近藤 龍二	高橋和巳研究
	浜田 秀一	中上健次研究
	藤井 晴稔	志賀直哉研究 — そのリアリズムと詩的描写
	藤富 孝士	モリスコの歴史
	水足 博臣	オランダ植民地経営下のジャワ村落 — 十九世紀中葉を中心に
	荒川 利恵	装飾 — 幻影としての仮面
	石松 理佳	死と超自然 — ボリビア高地において

コース	氏名	論文題目名
地域	江頭季里子	井上ひさしの戯曲における表現の研究
文化	大段 郁夫	音楽作品とは何か——音楽のもたらす感動へのアプローチ——
	岡崎 葉子	武士道思想の研究
	岡田 菜湖	sub-culture をめぐる試論
	帯名 秀和	クリシュナムルティ研究
	川原 和子	宮沢賢治童話研究——その文章表現の特徴を中心に
	川村 信郎	ユルバニズムと民衆——オスマンのバリ改造とゴダンのファミリステール——
	木村 秀子	スティーヴンソン研究——光へのあこがれをめぐって
	小林 由美	竹取説話の研究——伝承から物語へ——
	辻岡 弘子	イギリス史における南東部
	戸田 友子	莊子
	百々 稔	アメリカ大統領選挙におけるマスメディアの役割と影響
	西江 直美	近代イギリスにおける女性の実像——メアリ・ウォルストンクラフトの生涯——
	浜岡多佳子	幕末維新期における尾道の社会経済構造
	原田 博子	ラテンアメリカの農村社会における人間関係について
	広田知恵美	大衆伝達における日本語表現の研究——雑誌広告を中心に——
	藤永 智子	アメリカの成功の夢——『アメリカの悲劇』と『偉大なるギャツビー』の場合
	松岡 実	地方中核都市における交通需要と交通体系——広島都市圏の場合
	松瀬美智代	インカ帝国の経済機構
	丸本 剛	中世荘園における農民の生活——伊予国弓削島荘の農民闘争を中心に——
	満生 千幸	単一企業都市の研究——愛媛県新居浜市を例として——
光成 文江	アメリカにおけるイタリアンコミュニティの形成——イタリア系家族の変容をめぐって——	
社会	田島 伸夫	被爆者援護行政のあり方と課題——現行法から援護法——
文化	高力美由紀	マルクスにおける「個人」概念についての一考察
	辻川 浩己	中所得国の貧困と社会経済発展——ラテンアメリカ諸国をめぐって——
	森田 明彦	第一次石油危機の政治的意味
	山崎 実	段原再開発事業の実態
	有吉 克治	大量報復戦略の確立——NSC162/2を中心として
	内田 豊	現代社会における離婚問題の特質とその課題——離別母子家庭を中心として——
	大下 貢市	安全衛生と労災補償に関する一考察
	岡 潔	DROPSHOT——アメリカ核戦争計画に関する一考察——
	隠岐 幸代	父系家族と母系家族——インドのヒンドウ家族とナヤール家族の比較
	加藤 芳章	出版流通の実態と再販売価格維持制度
	上久保雄介	少年保護の現状と課題——少年法改正問題を中心に
	北野 智之	母子家庭問題からの一考察——少年の健全なパーソナリティ発達と自立のために——
	桐木 淳二	南アジア非核兵器地帯構想と印パの核開発
	熊谷 典文	住民主体のまちづくりの理論と文化行政に関する一考察
	清水 照子	家事労働の法的評価に関する一考察——交通事故判例に伴う主婦の逸失利益を中心に——
	園田 純子	高齢化社会における女性の地位についての一考察——とくに年金権をめぐって
	多久和英明	広島都市圏における都市交通政策に関する一考察
	大東 弘司	産業構造の変化に伴う対米経済摩擦の動向

コース	氏名	論文題目名
社会 文化	茶谷裕美子	原風景の研究
	徳永 景子	戦後日本における放射性廃棄物問題と科学技術政策
	中谷 文彦	ゲイザー報告に関する若干の考察
	西野 一彦	タイにおける食糧生産の不安定要素に関する一考察——森林伐採の原因と影響について——
	橋本 記一	都市計画と住宅政策——両大戦間期の住宅政策
	樋口 達也	フレックスタイムに関する一考察
	前田 隆二	団体交渉に関する法と実践——その今日の世界における動向——
	松本 秀一	パートタイマーの実態と意識構造に関する一考察
	山田 順二	技術革新と地域経済発展に関する一考察——未来を占うカギとしてのシリコン・バレー——
情報行 動科学	関 洋	オートクライン性増殖因子による培養ニワトリ鞏膜由来細胞の細胞間相互作用
	都築 昌男	Capsule Shedding in Heliozoan, Echenosphaerium Akamae (太陽虫エキノスフェリウム アカマエの表層剥離に関する研究)
	小川 芳郎	パーソナルコンピュータを用いたカッピングストック問題の一解法
	安達 淳	バイオフィードバックによる心拍制御に関する基礎的研究 —— 特定量課題におけるフィードバックの有効性 ——
	石川 明徳	制限摂食状況におけるデンショバトのサーカディアンリズム —— 梓光周期とオペラントスケジュールを用いて ——
	井上 由香	素子拡張型検査系列生成手法に関する研究
	上田 祐子	メッセージの送り手の数と専門性が態度変容に及ぼす効果に関する実験的研究
	宇野 宏	不安反応に関する研究—— 反復暴露効果の検討 ——
	尾村 保宏	災害避難行動に関する実験的研究
	春日井英夫	マウスを用いたグラフィック表示法
	金藤 浩司	統計学の研究——パーソナルコンピュータをグラフィック化可能なインテリジェント化された会話型端末にするソフトウェアの開発
	木元 朋子	初代培養ツメガエル肝実質細胞の増殖と分化機能に関する形態学的研究
	坂本 峰子	スクランブル型の符号化解析に関する研究
	相良 勝	少数者の意見・判断が集団に及ぼす影響に関する実験的研究
	沢田 裕成	図形入力装置の入力変換及びその応用に関する研究
	下川 久俊	白血病株細胞の分化誘導に伴う核蛋白質の変化
	神保 孝裕	ルート情報が距離認知に及ぼす影響についての実験的研究
	高田かおる	低酸素環境下におけるラットの行動分析 —— 基本強化スケジュールと生理学的指標を用いて ——
	竹下 斉	ラットの回避学習事象における視覚誘発電位
	竹政 浩昭	8インチフロッピィディスク間のファイル転送に関する研究
	田中みゆき	太陽虫微小管における再構成に関する研究 ～ ルテニウム・レッドの効果
	田中 利枝	パソコンによる型紙の作成
	中条加奈子	ヒトの睡眠——覚醒リズムに関する精神生理学的研究
寺田 博之	酵母ペルオキシソーム系遺伝子群に関する研究	
中尾 洋一	パーソナルコンピュータにおけるワードプロセスの研究	

コース	氏名	論文題目名
情報行動科学	西山 英明	自動配線プログラムに関する研究
	野中佳代子	視線方向がパーソナリティ認知に及ぼす効果に関する実験的研究
環境科学	村田 浩之	論理設計と検査設計の一体化に関する研究
	望月 直子	白血病細胞の分化誘導と遺伝子発現
	吉川 悦次	三次元構造物体の隠線消去に関する研究
	渡部久美子	状態不安に及ぼす他者の共在効果
	川原 章弘	イオンクラマトグラフィーのケイ酸塩岩石分析への応用に関する研究
	児玉 愛彦	柱状物体のまわりにおける Navier-Stokes 流の数値解析
	赤木 俊哉	高速高分解能分元装置の開発
	阿佐 祥史	3次元多様体の被覆空間
	上田 英司	希土類化合物の磁性
	大井手広毅	常微分方程式の安定性とその実例
	大内 達也	土地利用が斜面形に与える諸影響 — みかん畑の場合 —
	勝治 洋子	ラーベス相化合物の水素吸蔵特性とその物性
	上村 美雪	3次元空間内の野性的球面
	栗田 正弘	「Hassler Whitney の埋め込み定理」について
	甲村 浩之	マングローブ植物の生理・生態学的研究 — 特に培養と水分経済を中心にして—
	桜井 潤一	尾生地区における地すべり調査とその考察
	砂田 功	太田川感潮河川域における環境動態
	高上 佳子	干拓・埋立による広島デルタの微起伏と地盤特性
	武部 友美	X線小角散乱による生体膜の研究
	津野 知香	光子相関法による粒子径分布解析プログラムの開発
中村 敏彦	Zn _x Mn _{2-x} Sb の核磁気共鳴	
橋 徹	広島市高陽町における快適環境管理手法としての「市民農園」に関する研究 — 新しい生活者運動の見直し—	
増野 茂	東広島市の都市気候に関する研究	
真那子一儀	広島市高陽町における快適環境管理手法としての「市民農園」に関する研究 — 子供の原体験教育と市民農園—	
役田 健一	環境特性のリモートセンシング — 宮島の山火跡地におけるリモートセンシングの基礎的研究	
安居 嘉秀	セレンの水素化物生成—加熱石英セル原子吸光分析法の研究	
吉田 道生	広島県東城町付近の帝釈石灰岩の層序と構造に関する研究	
馬場 浩二	コンピュータを用いた内容分析 — T. S. Kuhn, The Structure of Scientific Revolutions への適用—	

II 修士論文

研究科	氏名	論文題目名
地域研究	坂田 恵	転換点としてのニクソン時代 — 新連邦主義—
	佐々木真弓	スリ・ランカの歴史と政治
	大村 次郎	初期ヘーゲル研究 民族宗教の現実性
	加藤 博子	魔術的観念論の研究

研究科	氏名	論文題目名
地域 研究	小出 晃久	Herbert C. Hoover とその時代 —アメリカ現代国民国家の形成とハーバート・フーヴァー—
	河野 賢司	Yeats And The Noh (イエイツと能)
環境 科学	中谷 洋子	Organisation der Erfahrung bei Ernst Toller — Ein Versuch (エルンスト・トラーにおける経験の構成—ひとつの試論として)
	吉本 和弘	Lewis Carroll 研究 —'Fall'の vision—
	李 庸 憲	日・韓国語における敬語表現の比較研究
	曾 徳 芳	台日の都市における中心商店街の比較研究
	権 恩 淑	日・韓国語における受身表現の比較研究
	大西日出和	日本語の文における意味構造の解析を行うシステムに関する研究
	秋月左都士	低成績者に対する原因帰属がリーダーの行動に及ぼす効果
	有馬 俊幸	森林生態系のP循環に果たす昆虫相の役割
	石川伸太郎	アフリカツメガエル生体肝実質細胞初代培養系での細胞増殖及び肝機能について
	今岡 晶子	再構成法による光合成水光分解の分子機構の研究
	山口 恵子	山火事後初期の土壌中型動物相の回復過程
	岩永 誠	嫌悪刺激の到来状況下における心拍の時系列解析
	大内 章義	地すべり・山崩れに関する研究 —自然放射能探査の検討—
	小泉 伸	リー群上の調和解析
	佐賀 実	Zr(M, M') ₂ 擬二元合金の水素吸蔵特性とその物性
	貞村 英昭	R-Ge系金属間化合物の磁性
	澤田 健	ツメガエル卵母細胞の初期成長期におけるRNA及びタンパクの合成について
	下垣 章裕	P _L =6 GeV/C陽子—陽子散乱の非Regge的dataの分析
	新谷 義弘	VLSIの配線問題について
	関 かつ子	奄美大島における集落景観の地理的構成
高松 修治	広島周辺の二次林の現状と人為との関係	
田中 貞浩	環境変化における細胞壁の役割	
都留 俊之	島根県益田市新生界の層序学的・古環境学的研究	
当山 忠久	Gd金属間化合物の核磁気共鳴	
中田 文夫	連続フローシステムを用いる原子スペクトル分析法の研究	
中村 浩之	高分解能ファブリー・ペロー分光器の開発と超流動ヘリウムのラマンスペクトルの研究	
萩原 繁和	一成分プラズマの理論的研究	
藤屋 昇	Eu _{1-x} TmxSeの磁性	
松本 宏志	紅藻類 ウシケノリ目の化学分類学的研究	
道嶋 正司	層状化合物 RM ₂ X ₂ (X=B, Si, Ge, M=Cr, Mn, Fe, Co)の磁性	
宮内 浩	マングローブ植物の生理・生態学的研究	
村上 元良	レーザー光散乱用ヘリウム3クライオスタットの開発	
渡部 勉	層状化合物SrFe _{1-x} Co _x O ₃ の構造と磁性	
目 耕治	地すべり・崩壊に関する研究 —広島県作木村の事例について	
竹下 敏一	ニワトリ胚鞏膜繊維芽細胞の産生する細胞増殖促進因子の分離とその作用	
中沢 泉	垂下式養殖マガキの重金属濃縮	

編集後記

石の上にも3年とか。広報委員、それも『飛翔』担当して3年。私も多くのこと学んだと思う。1年間に合計60～80ページの小冊子とはいえ、企画、原稿、校正、そして幾度となく繰返される学生編集委員とのやりとり。どのテーマの場合にも、総合科学部というひとつの社会があり、そこに渦巻く人間模様がみえた。『飛翔』を生み出す人と読む人の間に横たわるクレバスを埋めんとする不断の努力を思い、少なくとも私はこれから『飛翔』の愛読者になりそうである。(広報委員 堀 信行)

『飛翔』は総合科学部の広報紙です。これを発展させることは総合科学部を発展させることにもつながるのです。『飛翔』をみんなで育てましょう。

(広報委員 水島 裕雅)

微小な差も長い積み重ねの結果は非情です。『飛翔』本号を片手に、飛翔の志が卑小な結果に終わらぬよう、心がけましょう。

(広報委員 清水 昭俊)

今回は殆んど紙面に反映されるような活躍をしなかった。裏方としては...?ひょっとして次代のひしう『飛翔』を担うのはぼくらだったりして...

(吉田雄一郎)

総科は変わるべくして変わってゆくのか。

『飛翔』を(見)捨てないで下さい。

(古川 哲史)

『飛翔』の先輩方、および原稿をお寄せくださった先輩方、ご卒業おめでとうございます。もう『飛翔』なんて見たくない!!なんて言わないで、これからもどうぞよろしく。私も早く引退して外野になり

たいなあー...。

(向山 敦子)

自分の原稿をじい〜とながめていると、「ほんまにこんな字あったんかいな」というようなけつないな気持ちにしばしばかられます。『飛翔』のカメラマンである僕には文字というものの本質にもせまり、ものを見るすどい目がそなわっているんだ、とも思えたのですが、あとで考えると単に字がきちやないだけだったのかもしれない。

(海堀 修)

『飛翔』の編集にたずさわってもう2年。思えば、入学当時は某編集委員の方からブレーンバスターのような指導攻撃を受け、さらに2年になってからは、某教官のサソリ固めのような指摘を受けてきました。3年になったら、右半ひねりを加えた受身のとれないバックドロップでK・Oされるのでしょうか。でも、私が死すとも『飛翔』は死せず。今年度も『飛翔』は健在です。

(野田 啓三)

今回の特集はいかがでしたか。総合科学部のしくみ・行事が少しはわかっていただけだと思います。新入生の皆さんは学生生活の指針に、卒業生の皆さんは総科の思い出にこの特集を利用していただければ幸いです。我々の力が及ばず、調べることでできなかったことも多いので編集委員一同反省しております。最後になりましたが、インタビューに応じてくださった方々、原稿をお寄せ下さった方々、誠にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

「飛翔」 No. 28

編集委員

58年度生 海堀 修 櫻井 幹士 野田 啓三 古川 哲史 向山 敦子

59年度生 岡本 光治 末松 浩嗣 福田 智恵 吉田雄一郎

なお、編集にあたっては、広報委員会の『飛翔』担当、堀 信行、水島裕雅、清水昭俊、鶴岡英一の各教官、および事務官、南沢大雄、宮城勝彦、内田精二の方々の協力を得ました。